

ニュースレター 目次

1. 第37回セミナー（赤谷）開催のお知らせ	1-3
2. 「環境社会学・修士論文発表会」のお知らせ	4
3. 龍谷大セミナー報告	5
4. 豊岡セミナー報告（前号からの続き）	13
❖ 編集部よりお詫びと訂正	14
5. 事務局から	14

龍谷大セミナー報告特集

3-1 セミナー報告（セミナー事務局より）	5
3-2 自由報告	5-7
3-3 シンポジウム	8
3-4 参加者より	8-12

1 第37回セミナー（赤谷）のお知らせ

【日時】2008年6月6日（金）～8日（日）

【場所】群馬県利根郡みなかみ町

【テーマ】（仮題）生物多様性と地域社会，行政，NGO，研究者の協働

【開催主旨】

群馬県みなかみ町の国有林「赤谷の森」では、2004年3月に財団法人日本自然保護協会と林野庁関東森林管理局が締結した協定にもとづき、「三国山地／赤谷川・生物多様性復元計画（赤谷プロジェクト）」が実施されています。

赤谷プロジェクトは、約1万ヘクタール（10km四方）の国有林を、10年単位の協定によって、地域住民，NGO，行政機関が共同管理する日本初の試みです。規模の大きさ，期間の長さだけでなく，地域住民で組織する地域協議会と日本自然保護協会，林野庁関東森林管理局がコアセクター（中核団体）となり，森のあるべき将来像を合意した上でそれを森林計画に反映させる点が特徴的です。

共同管理の体制を整えた上で，プロジェクトは「生物多様性復元」と「持続的な地域社会づくり」を二大目的に，上述のコアセクターと研究者・市民サポーターが協働して，自然環境のモニタリング調査，スギ・カラマツ人工林の自然林への復元実験，日本初の治山ダム撤去による溪流環境修復計画，教育活動・地域づくり・エコツーリズムのための旧街道網の復活などに取り組んでいます。

このプロジェクトを支えているのは，①1990年代，同地でリゾート開発とダム開発計画をめぐる住民運動を経験した，自然湧出の温泉を観光資源とするみなかみ町新治地区の地域住民，②かつて地域住民と共に自然保護運動を展開し，プロジェクトの企画・総合事務局を務める日本自然保護協会，③人工林の自然林への復元や治山ダムの撤去など，新たな取り組みにチャレンジする林野庁の現場スタッフ，④研究者・市民サポーターらの，日々の協働です。そして，この輪に，環境社会学会会員が複数名関与しています。

発足から5年，進行中のプロジェクトですが，地域住民・NGO・行政機関と研究者による地域環境管理の意思決定や協働のありよう，各地で進む自然再生の動きとの比較，国有林野行政の今後，自然保護運動と地域社会の新たな関係等，環境社会学会が考えるべき論点がふんだんに盛り込まれています。環境社会学の研究戦略・実践戦略を「赤谷の森」という現場で考えるセミナーにしたいと思います。

【内容（予定）】

- 6月6日（金） 夕方 受付 夜 オープニングトーク、各種委員会など  
6月7日（土） 午前 エクスカーション  
午後 学会総会 自由報告 夜 懇親会  
6月8日（日） 午前 シンポジウム  
「生物多様性と地域社会、行政、NGO、研究者の協働（仮）」  
13時頃解散予定

※現地は上越新幹線「上毛高原駅」、上越線「後閑駅」よりバス・自動車で数十分のところにあります。

【第37回セミナー事務局】

セミナー事務局：菊地直樹，嵯峨創平，茅野恒秀（事務局長），土屋俊幸，丸山康司，宮内泰介（自由報告担当）  
問い合わせ先：〒104-0033 東京都中央区新川1-16-10 ミトヨビル2F  
財団法人日本自然保護協会 茅野恒秀  
TEL 03-3553-4107 FAX 03-3553-0139 E-mail: chino@nacsj.or.jp

【自由報告の募集】

以下の事項をご確認の上、記載事項を記入してお申し込みください。

- ・ 報告者（登壇者）は会員に限ります。
- ・ 一報告の持ち時間は、報告20分、質疑応答15分の予定です（申し込み人数により変わります）。
- ・ 応募が多数に及んだ場合、内容が本学会セミナーの報告にそぐわないと委員会が判断した場合には、発表を遠慮していただくこともあります。

■報告申し込み方法

- ・ 締め切り：2008年4月7日（月）必着
- ・ 申込方法：下記の宛先へEメールもしくは郵送で（事務効率化のために、申し込みはできる限りメールをお願いします）。一週間を目処に確認の返事を出しますので、返事のない場合はご確認ください（事務局の都合で3月17日～31日は返信ができませんが、ご了承ください）。
- ・ 申込み時の記載事項
  - 1) 報告タイトル
  - 2) 報告者氏名、所属
  - 3) 連絡先（住所・電話・Fax・Eメール）
  - 4) 報告概要（800字程度）
  - 5) 使用希望機器（会場の都合により希望にそえない場合もあります）

■プログラム掲載用報告要旨

- ・ 要旨締め切り：2008年5月7日（水）必着
- ・ 送り先：上記の報告申し込みと同様。
- ・ 要旨の形式：文字数2800字以内。要旨集は各報告2頁（A4）で組みます。図版（2枚まで）を入れる場合は目安として、B5一枚の大きさを1400字に換算して字数を調整してください。

■自由報告の申し込みおよび報告要旨の宛先

〒060-0810

北海道札幌市北区北10西7

北海道大学大学院文学研究科 宮内泰介

Eメール [miyauchi@let.hokudai.ac.jp](mailto:miyauchi@let.hokudai.ac.jp)

TEL/FAX 011-706-4150

## 2 修士論文発表会（特別研究例会）のお知らせ

2007年度環境社会学会特別研究例会「環境社会学・修士論文発表会」を下記のとおりキャンパスプラザ京都にて開催します。環境社会学にかかわる修士論文の成果を発表していただき、じっくり議論ができる場にしたいというのが本研究例会の趣旨です。毎回刺激的なコメントが飛び交い、発表者、聴衆の双方にとって新たな発見や解釈がもたらされる充実した集まりになっています。大学院生の皆さんにとって貴重な意見交換や交流の場となるとともに、すべての研究者にとって意義深い討論の場となることと思われまます。どうぞ奮ってご参加ください。

**【日時】** 2008年3月8日（土）10:30-16:30（予定）

※ 開催時間は発表者数に応じて変更することがあります。

**【場所】** キャンパスプラザ京都（JR 京都駅ビル駐車場西側）4階第4講義室

※ 会場へのアクセス方法 <http://www.consortium.or.jp/campusplaza/guidance.html>

主催：環境社会学会

企画担当：箕浦一哉（山梨県立大学）＋秋津元輝（京都大学）

### <プログラム>

#### ■開会の挨拶・事務連絡（10:30～10:35）

#### ■第1部 自然保護の意味（10:35～12:20） 司会=未定

1. 日本のディープ・エコロジー——前田俊彦の環境思想  
小障子正喜（滋賀大学大学院）
2. 生活実践からみた自然再生事業の環境社会学的考察  
平井勇介（早稲田大学大学院）
3. 人的資本が生み出す里山の公益  
——函師小野路歴史環境保全地域における伝統的技法を用いた里山保全活動の実践から  
佐藤 悠（法政大学大学院）

#### ■第2部 運動・政策・自治（13:15～15:00） 司会=未定

4. 地域福祉における市民の参加と連帯——NPO 法人 MOMO を事例に  
米良重人（山梨大学大学院）
5. 森林 NPO がとった砂利採取事業への無回答の意味——北海道白老町における森林 NPO の活動から  
矢澤和河（北海道大学大学院）
6. カネミ油症事件における行政組織の問題放置のメカニズム  
宇田和子（法政大学大学院）

#### ■第3部 開発と生活（15:10～16:20） 司会=未定

7. ボルネオ島中央部における森と人の社会空間——自然資源をめぐるブラウンとプナンの関係誌  
佐久間香子（北海道大学大学院）
8. ダム計画をめぐる生活史——積み重ねられた時間を聴く  
森 明香（一橋大学大学院）

#### ■講評、閉会あいさつ（16:20～16:30）

### 3 第36回 龍谷大セミナー報告

#### 3-1 セミナー報告 (セミナー事務局より)

脇田健一 (龍谷大学)

第36回セミナーでは、「自由報告」と「環境社会学の『研究戦略』はなにか」をテーマにしたシンポジウムを行いました。自由報告では学会員の堀畑まなみさん(A部会:被害構造の解決)、古川彰さん(B部会:持続可能性と社会システム)、野田浩資さん(C部会:環境言説の多層性)に座長としてご協力いただき、有意義な議論を行うことができました。また、シンポジウムでは、中澤秀雄さんの司会のもと、湯浅陽一さん、関礼子さん、谷口吉光さんの3名の皆さんに自らの調査・研究での経験、研究キャリア等を踏まえた興味深い話題を提供していただき、船橋晴俊さんからのコメントやフロアからの意見とともに、会場全体で議論を深めることができました。深く感謝申し上げます。

開催にあたりましては、会場の準備や受付業務等で龍谷大学文学部教務課職員の皆さん、龍谷大学社会学部の学生の皆さんに大変お世話になりました。また会場の撤収につきましては、時間の関係から、セミナーにご参加いただいた会員の皆様にもご協力いただきました。ありがとうございました。

#### ■会計報告

会計は下記の通りです。863円の黒字分については、学会会計に繰り入れます。

収入		支出	
参加費収入	71,000円	参加費1,000円, 参加者71名	
<b>収入合計</b>	<b>71,000円</b>		
		1.アルバイト代金	57,475円 印刷・折作業、運搬作業等を含む
		2.弁当代金	3,920円 スタッフとアルバイト7名分
		3.文房具代	1,365円
		4.事務局諸経費	7,377円 茶菓子、タクシー(印刷物運搬)
		<b>支出合計</b>	<b>70,137円</b>
		<b>収支差額</b>	<b>863円</b> 学会会計に繰り入れ

#### 3-2 自由報告

A部会:被害構造の解決

堀畑まなみ (桜美林大学)

第1報告の「基地騒音対策の問題点-受苦の集中的局地化-」(朝井志保・都留文科大学、富士常葉大学非常勤講師)は、厚木基地の基地機能移転先である岩国基地問題を取り上げた。基地と共存してきた岩国にて、沖合移設事業に絡み、これ以上の基地拡張と機能強化について住民投票にて明確に反対を示したことで、交付金と財政問題、基地機能の集約で岩国に騒音被害の集中的局地化が発生すること、公共性が高いとして騒音被害の受忍を主張することの問題点などについて詳細な報告がなされた。受益圏・受苦圏の視点から分析を行い、認識の差異について図で示したため、参加者にわかりやすい報告となった。運動が活発化していないと受苦が増強されるという報告者の指摘は、地域で発生している環境問題に普遍的なことであるため、改めて考えさせられる報告となった。

第2報告の「『沖縄命の森やんばる訴訟』に関わる沖縄北部地域林道事業実態調査報告」(熊田豊・関西学院大学総合政策研究科)は、沖縄北部地域での林道事業の実態及び被害について現地の写真を多用して行われた。産業構造に占める割合では林業は1%であるにも関わらず、山を無理に切り開いて道を作り、赤土が流れ出している現場の写真は痛々しいものであった。報告後、訴訟に関することや、アセスメントに関する議論がなされた。とりわけアセスメントについては、意図的にアセスメントの法的要件にかからないようにしている現状のひどさが伝わった。報告者によるさらに深めた研究に期待したいと思う。

第3報告の「環境リスク社会と環境情報民主主義-PRTR制度を事例として-」(寺田良一・明治大学)は、

今日の環境問題の潜在的、長期的、拡散的な環境リスクへの対応には、予防原則を含めた「環境情報民主主義」的政策・原則が必要であるとし、なかでも PRTR (汚染物質排出移動登録) 制度をとりあげた。この制度により排出量が減少した要因について2つの仮説(環境市場的誘因, 新しい「環境運動フレーム」の構築)をあげて, PRTR 制度について「リスク定義」における参加民主主義クレームを正当化したという評価をした。日本での「環境正義・公正」のクレームは局地的であるため, (アメリカのような普遍的な) レトリックを, 環境運動のフレームとして提示できないという報告者の指摘は, この部会の第1報告の話と関連させて考えることができ興味深いものとなった。

第4報告の「環境影響評価と環境争訟の相関-上関原原発予定地アセスの住民参加を事例として-」(早瀬利博・長崎大学大学院生産科学研究科)は1981年に浮上し, 現在も紛争が続いている上関原原発を事例に, 環境影響評価手続と環境裁判手続を比較した。上関原原発でのアセスメントでは, 通産省指導のもとに実施され, 事業者の恣意性が強いレポートが提出されたことから, 原発を特例として住民参加がなされなくてもアセスメントが完了できるという問題について, 裁判手続と比較することでアセスメントの欠陥を指摘するという試みであった。フロアからは, 上関原の現状についての質問や裁判と比較することの意義の質問など, 活発に質問がでて, 議論が行われた。この事例はまだ動いているため, 今後も報告者によるさらなる研究に期待したいと思う。

以上のように報告者が丹念に事例を追った報告がこの部会ではなされた。フロアで聞いている方々にとっても環境問題を追うことにひたむきさや誠実さが必要であることを改めて考えさせられる報告となったと思える。

最後に報告の時間をできる限り優先してしまったため, 議論の時間がすべての報告で少なくなってしまったことをお詫びいたします。

## B 部会：持続可能性と社会システム

古川 彰 (関西学院大学)

第一報告, 神頭氏による「慣習法的共同体社会における土地観念とその維持・保全」は, 慣習法的な土地の維持に宗教性が深く関与しているゆえに, 共同体社会では環境が持続可能な状態に置かれていることを, インドネシア・ロンボク島の集落調査をとおして明らかにした。その明快でロマンティックな論理展開と結論にたいして, フロアからも説明の枠組みがロジカルで近代的な概念への当てはめに過ぎないのではないかという疑問がだされた。インドネシアの村落にある種の環境保全の原型的なものを見ることはたやすいが, 同じ地域で次々と近代化され破壊されていく自然もあるという現実をどのように説明するのだろうか。近代国家による近代法の行使とのかかわりを加味して分析を加えるべきであろう。ロマンティックに語る事が問題なのではない。ロマンティックな夢想ではないかと思われてしまうようなデータ提示と分析に疑問が投げかけられたのであろう。

第二報告, 清水氏による「環境ストック概念による持続可能な地域発展の理論的検討」は, 公害地域を再生していくための制度の理論的枠組みを西淀川道路公害後の地域再生を事例に検討された。宇沢弘文氏の社会的共通資本論をベースに, 環境ストックを破壊してしまうような制度がなぜ作られたのかを, 地域社会の内部要因と制度をつくる外部要因とから明らかにしたうえで, 環境ストック(人的社会関係, 文化的ストック)を維持するための社会的管理のあり方を提示しようとする意欲的な報告であった。しかし, たとえば原発や産廃処分場といった迷惑施設建設による事例とは異なり, 事例地のように道路の通過点であることによって環境ストックが破壊されたという事例では, いくつもの分析の留保が必要であろう。

第三報告, 三輪氏による「蔡温の資源管理政策」は, 沖縄における18世紀の資源管理政策をになった人物(蔡温)の事跡をとおして環境ガバナンスの可能性を示唆しようとした報告である。この時期にすでに沖縄がかかえる赤土流出問題などへの対処についても言及されており, 興味深い事例の紹介であ

った。しかし、フロアからも指摘されたことだが、ここに環境保全、環境ガバナンスの原型があるのだという結論をだそうとすれば、おそらく幾重にもめぐらされているはずの歴史的条件を加味して分析をくわえなければならないだろう。

ちょっと厳しいコメントになったが、3つの報告からは、ともすれば観念的な持続可能性という言葉だけが先行する現状にたいして、具体的な内実を見出そうとする真摯な努力を感じることができた。第二報告の環境ストックという言葉借りれば、第一報告が環境ストック維持の原初のあり方を、第三報告はそのガバナンスを、第二報告はその破壊の要因と再生の方法を明らかにしようとしたのだと報告の趣旨を受け取って、今後の展開を期待したい。

### C 部会：環境言説の多層性

野田浩資（京都市立大学）

第一報告「ツバルにおける海面上昇に対する認識形成—環境言説の受容と体験知の意味づけ」（小林誠・首都大学東京社会科学部研究科）は、地球温暖化によって沈みゆくツバルの現地調査報告であった。首都と地方での2カ所のインタビュー調査に基づき、海面上昇に対する「認識」が、海面を直接観察することによってではなく、ラジオや日常会話を通じた科学的「言説」との接触によって形成されたことが示された。討議では、現地の生業やコミュニティの状況、ツバルからの移住の状況についての質問が続いた。環境認識形成と「生活」の関連をより詳細に明らかにすること、また、「体験知／科学知」相互の形成プロセスについて理論的に精緻化することが期待される。

第二報告「戦前環境史から何を学ぶか—環境思想と行動に見る『国土愛』と『郷土愛』の構造—」（佐々木育子・東京大学新領域創成科学研究科）では、南方熊楠と志賀重昂がとりあげられ、愛国心、郷土愛と環境思想との関係が問われた。討議は、伝統的自然観の位置づけ、および、ナショナリズムと自然保護思想の「両立／対立」を主要な論点として進んだ。ナショナリズムと保護思想の「共犯」のメカニズムを照らし出していくことは、グローバル化の進む現代における環境思想研究にとって大きな意義をもつであろう。

第三報告「自然保護政策における環境保全の担い手と正当化の論理—ラムサール条約登録湿地・宮城県蕪栗沼周辺水田における『ふゆみずたんぼ』を事例として—」（武中桂・北海道大学文学研究科）では、マガンの保護政策と地元農業側のコスト増大との葛藤の解決をめぐる、行政の提示する解決策を地域住民がどのように受け入れ、合意形成がなされたかが示された。討議のなかで、「正当化の論理」の水準での議論から、「納得」が生み出されていくプロセスをめぐる議論へと焦点が絞られ、合意形成研究に1つの方向性が見いだされた。

第四報告『正義の味方』と居住者の間—ジョン・ミュア、シエラ・クラブ、1889-1940』（加藤鉄三・立教大学文学部非常勤講師）は、創立期のシエラ・クラブの内部資料に基づく、自然保護運動史・環境思想史に関する報告であった。シエラクラブが、単純に「正義の味方」として振る舞うのではなく、州政府よりは連邦政府（森林局）と連携を求めると、戦略的でプラグマティックな活動方針をとっていたことが示された。シエラ・クラブ（保存派）と森林局（保全派）という従来の二元的な対立図式の書き換えとともに、アメリカの大規模環境NGOの行動様式についても考えさせられるものであった。

各報告の興味深い問題提起と討議のなかで提出された多様な論点に、環境社会学の新たな可能性を感じさせられた。先行研究に対する位置づけをおこなうことによって、各報告の主張の意義はより明確になるであろう。「環境言説の多層性」と名づけられた部会であったが、言説・思想の形成、言説と実践の連関、理論と実証の架橋など、環境社会学には、まだまだ対象とされてこなかったテーマが多くあり、まだまだ多くの理論的課題が残されていると再認識させられたという意味で有意義な部会であった。各報告者および活発に討議に加わっていただいた会場参加者に感謝したい。

### 3-2 シンポジウム

テーマ：環境社会学の「研究戦略」はなにか 中澤秀雄（千葉大学）

シンポジウムの最後に申し上げたように、本シンポジウムの最大の成果は、3人の優れた報告者に登壇頂くことに成功したこと、さらには最も適切なコメンテーターを得たことである。三つのご報告は、それぞれの研究史を踏まえて現場との関係、研究者の目標設定や構え、研究者人生の春秋について示唆に富んだ指摘を多数含んでおり、最後の報告が終わったときには会場から自然発生的に拍手が出た。勇気をもって報告をお引き受けいただいたシンポジストとコメンテーター、一方では時間延長でご迷惑をかけた会場校の田中・脇田さんや、ご活躍いただいた運営補助の学生さんに感謝申し上げたい。

一方で討論の部分は、企画側としても、おそらくは会場の受け止めとしても、やや生煮えであった。ある種の「危機意識」のようなものを前提にしている層と、そうでない層との温度差があったように思う。つまり本シンポジウムをめぐる3層の言説—シンポジウムの場でのそれと、シンポジウム以外のJAES表域、および裏局域—が、分離したまま留め置かれたのではないかと思う。それは企画者の力不足ゆえなのだが、それでも、ほんとうは当日もっと展開したかった論点がある。それは環境社会学会が当初設定した「戦略」の背景にある、academic goalに関する思考枠組みの再構築が必要なのではないか、ということである。たとえば当日、谷口さんから出された「publishすることが環境社会学者の目的でいいのか」「何らかの文脈構築の技術のようなものを磨かなくていいのか」という問題提起は、社会科学academiaが持つ出発点と目標そのものの問い直しであるが、実はここ数年の環境社会学会セミナーが目指している方向とは共振する問題提起であるようにも思う。いささか話を大きくすると、ある種の啓蒙主義的学問知と身体問い直しなのかもしれない。

ところで、本シンポジウムと『環境社会学研究』誌との関係について会員の皆様のご了解を乞いたい。これまで数年、シンポジウムの内容が同誌の特集企画となることが慣例化していた。しかし今回、結果としてそうってしまったのだが、シンポジストのうち二人は編集委員長と編集事務局長である。お二人は謙譲の美德を発揮されて、本シンポジウムの内容を学会誌と連動させない、つまり小特集とはしない、ということに決まっている。しかしせっかくの充実した内容を埋もれさせるのも勿体ないので、丸山研活委員長とご相談して、別の形で学会誌に当日の内容を反映できるよう、調整したいと考えている。

最後に改めて企画に協力いただいた皆様に御礼申し上げるとともに、いささか刺激的な問題設定・物言いによって何らかの意図せざる結果を招いたかもしれないことには、お詫び申し上げる次第である。

### 3-3 参加者より

A 部会：自由報告印象記

青木聡子（名古屋大学）

私が参加した「A部会：被害構造の解決」では4本の報告があった。ひとつの「お話」として完結したものから事例を詳細に描写したものまで、それぞれ異なる段階の報告が並んでおり、いずれも興味深く拝聴した。料理に例えると、ベテランシェフによる完成された味の一品（第三報告）、独自の味付けを模索する若手シェフによる一品（第一報告・第四報告）、そして「こんな食材を仕入れました」という素材の紹介（第二報告）といったところだろうか。ベテランシェフの料理は「さすが。」と思わせるものであったし、新米シェフの素材紹介は素材そのものが魅力的で、今後どのような一皿になっていくのか楽しみに思わせるものであった。若手シェフの一品は、同様の課題、すなわち、手元にある素材をどのような道具でどのように調理すればよいのかという課題に向き合っている私にとって、それぞれ大いに参考となるものであった。こうした全般的な印象に加えて、報告を聞きながら感じた、または、帰りの新幹線のなかで考えたのは、以下の三点である。

まず、「無いものねだり」といわれることを覚悟して述べれば、事例の説明をもう少し詳しくしてほ



しいと感じた報告と、事例の詳細な説明で終わってしまっていて残念と感じた報告の双方があったことである。前者に関しては、結論の論拠を一つ一つ事例のなかから挙げて説明した方が説得力が増したように思えたし、後者に関しては、せめて「問い」を発してほしいと感じた。

次に、これも「無いものねだり」であるが、総合討論の時間が設けられなかったことが残念であった。A 部会は他よりも報告数が多く時間の制約があり、このような要求に無理があるのは重々承知である。それでもあえて言わせていただくと、法制定や制度形成による「被害構造の解決」の可能性を提示した第三報告を踏まえて、その他の報告のなかで指摘された被害構造や被害の状況がどのように解決されるのか、それぞれのシナリオを探る議論があれば、よりいっそう充実した部会になったのではないだろうか。

最後に、雑誌の「研究ノート」や「レターズ」に相当する、現場からの報告（素朴な事例報告）のためのセッションを設けてもよいのではないかと感じた。環境社会学会には自ら当事者としてフィールドに身を置く会員が少なくない。この部会でも見られたように、事例を詳細に調べ上げ現場を抱える問題を見出してはいるものの、問いや仮説、分析枠組みを模索している段階の院生も多いだろう。そうした会員が自らのフィールドについて報告し、フロアとのやり取りを通じて事例を相対化する機会があっても良いのではないだろうか。この点を突き詰めていくと、セミナーという場、さらには環境社会学会そのもののあり方を問うことにもなるので軽々しく提起できることではないが、今回の自由報告にフロア側として参加し感じたこととして付け加えておきたい。

**B 部会：「持続可能性」への多様なアプローチ——B 部会「持続可能性と社会システム」に参加して**  
松井理恵（筑波大学大学院）

B 部会「持続可能性と社会システム」では、フィールドワークにもとづいてインドネシアの村の土地（伝統林）維持について論じる神頭報告、「環境ストック」という理論枠組みを提示し、西淀川道路公害を分析する清水報告、近世琉球の資源管理政策に着目し、当時の文献を読み解く三輪報告と、対象も方法論もまったく異なる三者三様の報告がなされた。しかしながら三氏のご報告は、今日、環境問題や地域社会を考えるキーワードとなっている「持続可能性」に対し環境社会学はどのようなアプローチができるのか再考を促す点で、本部会のテーマにふさわしい報告であったのではないと思う。本来ならば、部会場で議論に加われればよかったのだが、それができなかったことをまずお詫びしたい。そのうえで、三氏のご報告に刺激を受けてセミナー終了後の新幹線の中で考えたことを、この場を借りて書かせていただきたい。

神頭成禎氏はインドネシアのロンボク島バヤン集落にてフィールドワークをおこない、そしてバヤン集落の組織、森林に関する慣習法（Awig-Awig）の詳細な検討から、宗教性が伝統林の維持を支えていると主張した。また報告のなかで神頭氏は慣習法が集落構成員によって柔軟に改変されながらも伝統林が維持されてきたと述べたが、ディスカッションのなかでも、集落組織の説明の仕方や慣習法の成文化など、バヤン集落がいかにか近代を受け入れつつ、伝統林を維持してきたか的一端が明らかになった。このようなディスカッションの流れを受けて私は、近代化のなかで、集落構成員が神々、祖霊、精霊とのつきあい方をどのように変化させたのか、あるいはどのように維持してきたのかという指摘があれば、伝統林の維持を考える際に宗教性に注目した神頭氏の意図がより明確になったのではないかと考えた。

清水万由子氏は「環境ストック」という新たな概念を提示し、持続可能な地域発展は環境ストックの蓄積、拡充によって実現するとの考えのもと、「内部要因の力」（清水）に注目した理論枠組みを構築するための試論を展開した。今回のセミナーのシンポジウムでは、研究の理論的深化に関する活発な議論がおこなわれたが、清水氏の報告は若手研究者による環境社会学の理論的深化を考える意味でも、大変印象的であった。ただ、清水氏の「環境ストック」という概念がいかにかして生まれたのか、短い報告時

間では十分に説明がなされなかったような印象もあった。たとえば、私には「環境被害ストック」という、ある社会に環境被害が蓄積されるという考え方と清水氏の「環境ストック」という考え方は、まったく異なる発想にもとづいているように思われる。「環境ストック」概念の前提を丁寧に議論することから、理論枠組みとしての有効性が提示できるのではないか。

三輪大介氏は、沖縄の現在の自然環境と人との関わりを規定する歴史過程として、近世琉球の蔡温による資源管理政策に着目し、考察を展開した。持続可能な地域発展を考えるうえで、三輪氏の報告は非常に示唆深いものであり、現代でも通用するような資源管理政策が当時実施されていたことは注目に値する。近世の資料を丁寧に読み解く三輪氏に対して、そのような歴史的資料を扱ったことのない私的的外れな感想を抱いているだけなのかもしれない。しかしながら、三輪氏の報告を拝聴し一番気になったのは、蔡温という政治家が報告にあったようなすばらしい資源管理政策をなぜ実現できたのか、であった。司会の古川彰氏（関西学院大学）からもご指摘があったが、近世琉球の地域社会にこの蔡温の資源管理政策を位置づけることによって、三輪氏の論旨がよりいっそう説得力を持つのではないかと考えた。

三氏のご報告を拝聴し、「持続可能」というテーマに自分ならどのようにアプローチしていくのか、深く考えさせられた。最後になってしまったが、報告者の三氏へお礼を申し上げたい。

### C 部会：「環境言説の多層性」部会に参加して 川田美紀（早稲田大学大学院）

今回参加したC部会では、「環境言説の多層性」というテーマのもとに、4つの報告がおこなわれた。4報告は、フィールドワークに基づく研究と文献資料に基づく研究、国内の事例を扱っているものと海外の事例を扱っているものというように、研究方法や扱う事例はさまざまであったが、それぞれの報告が、自然に対する認識や「自然保護」をどのように論じるのか関心を持ち、参加した。

第一報告は、小林誠氏によるツバルの海面上昇をめぐる地元住民の認識を、環境言説の受容と体験知という観点から考察した報告であった。私がこの部会に参加したのは第二報告からであり、第一報告に関しては本来コメントする立場にないのだろうが、レジュメと要旨集を参考にさせていただくと、ツバルの人びとは、現在、海面上昇の認識を持っているが、それは彼らが地球温暖化による環境言説を受容し、さまざまな体験知のなかから海面上昇に合致したものを選択的に意味づけることによって形成されたと考えられる、と指摘されていた。社会的関心の高まっている問題であり、社会科学の分野からもこうした問題に取り組んでいく必要性を感じた。

第二報告は、佐々木育子氏の報告で、愛国政策と自然環境保護の関係について、明治期の神社合祀政策に対する南方熊楠、足尾鉾毒事件に対する志賀重昂の対応などから検討したものであった。佐々木氏は「愛国心」に基づく環境保護論はイメージが先行し、必ずしも実際の環境保護に結びつかないと指摘された。それに対して、問題設定の妥当性をめぐる議論が質疑でなされたが、私は、佐々木氏が報告の中で「郷土愛」と「愛国心」を対比的に用いながら事例を検討し、両者の関係について論じていた部分が興味深いと思った。

第三報告は、武中桂氏による報告で、ラムサール条約に登録された宮城県蕪栗沼周辺水田を事例として、地元住民が、自らの主張とはズレた行政の環境保全政策を、いかに受容していくのかを論じた内容であった。武中氏は、「自然保護」をめぐる行政と住民の間の埋めることのできない“ズレ”や、事例地が水田という“私有地”を対象とした環境保全である点に言及されていたが、いずれも今後の自然保護政策において重要な検討課題であると思う。

第四報告は、加藤鉄三氏による報告で、アメリカの環境保護団体として有名なシエラ・クラブとその会長を務めたジョン・ミュアに関する史料分析から、彼らの自然保護に対するスタンスについて論じたものであった。加藤氏は、「保存」派对「保全」派という枠組みでは彼らの自然保護活動を十分に理解できないと指摘され、「リージョナル」と「ナショナル」という新たな枠組みを導入して分析されていた。

短時間の報告であったにもかかわらず多くの史料を提示して下さったが、研究の位置づけが十分になされていたならば、質疑で議論がより深められたのではないかと思う。

最後に、各報告者が今後、それぞれの報告を論文化していかれる際に有用と思われるコメントの数々がフロアから寄せられていたことを記しておきたい。環境社会学会では、自由報告や朝まで討論は先輩方が若手を育てようという方針で取り組んでくださっていると聞かすが、まさにそのような場であったと思う。

### シンポジウム報告

安部竜一郎 (四国学院大学)

中澤秀雄 (千葉大学) の解題によれば、この 15 年の間に環境社会学の制度化は急進展し、学問や教育、政策評価などの場で位置を獲得するに至った。その反面、環境社会学の理論深化という点では、被害構造論や受益・受苦圏論、生活環境主義などといった「第一世代」の仕事以降、目覚しい展開は認められないという。本シンポジウムの企図は、この行き詰まり感を環境社会学の「研究戦略」の問題に還元することで突破口を探ろうというものであった。

これを受けて湯浅陽一 (関東学院大学) は、船橋に倣って、社会学理論を①中範囲の理論、②基礎理論、③原理論に分類し、これまでの環境社会学は①の構築に精力を傾け、②あるいは③のレベルまではよく射程に入れてこなかったと指摘した。湯浅によれば、現在の環境社会学は多様な①の並存状態となっており、そうした①を統合できるような理論が育っていない。その場合、①の前提となっている②や③のレベルに遡れば、共有できる視点が増えて、理論間の相互交流＝叩き合いも可能になるという。湯浅は、②の例として「合理的人間」に対する「道理性に基づく人間」という異なる人間類型 - 論を紹介し、そのような②の共有によって多様な①が異なる出番を保持したまま統合されること＝「広い意味での統合」が可能になるのではないかといういわば「基礎／原 - 理論遡及型」の戦略を提案した。

一方、関礼子 (立教大学) は、新潟水俣病の研究経験から、地域というより具体的な「場」を想定することによって、複数の中範囲理論が多層的かつ動的に織り込み合う可能性を示唆した。関によれば、飯島の被害構造論は環境汚染と健康被害者の周辺化が集積する特定地域の文脈と結び付けてこそ意味を持つのであり (そうでなければ交通事故による身体障害でも当てはまる一般理論となってしまう)、そうした被害構造の地理的空間性は受益・受苦圏論と接合することが可能であるという。T字型の研究戦略によって得られた一般性ある理論を再度具体的な事象とリンクし直すことで他の中範囲理論と関係付けようという関の戦略は、「地域性への再 - 埋め込み型」とでもいえるだろう。

理論統合の筋道を示そうという湯浅、関の報告に対し、谷口吉光 (秋田県立大学) は現場知としての環境社会学の貢献を重視する。谷口によれば、環境問題の具体的解決に対する社会学者の役割は、問題の複眼的理解や解決に向けた見取り図／文脈の構築、情勢分析などにあるという。こうしたスキルの養育のためには、1つの厚い調査事例から理論構築へ向かうT字型の研究戦略よりも、問題解決のためのプロセスで出会う複数の「井戸」(例えば有機農業・産消提携運動なら、社会技術、グローバル化、リサイクルなど)を次々掘っていくという「広くて浅い」アプローチのほうが有効であるというのが谷口の経験であった。事象の拡がりに寄り添いつつ、問題に係わる諸アクターとの相互作用の中で役割を見つけ出していくという点では「現場 - 創発型」と表せるか。

以上の3者の報告に対する船橋晴俊 (法政大学) のコメントは、「日本の理論社会学者の多くは理論から新たな理論が抽象できるという誤解に陥っており、むしろ1つ2つの深い事例研究から包括的な理論が構築されることが多い」というT字型の研究戦略の再確認であった。船橋によれば、谷口のアプローチも深い井戸を何本も掘っていると見なせるという。確かに、事例研究を基礎とする点で3者に共通しており、湯浅と関の違いは「事例→抽象→より抽象」か「事例→抽象→再び事例」という志向 (= 戦略?) の相違として捉えられよう。

シンポジウムを通して評者が気になったのは、事例⇔理論間の往来をあたかもそれ自体で抽出可能な「閉じた系」のように語ってはいないかという点である。例えば、日本の環境社会学の国際化と理論深化が進まないのは別々の問題だろうか。環境社会学のグローバルな伸張の中で、JAESの内向き加減はすでに指摘されている（『環境社会学研究』第12号長谷川「研究動向」）。環境社会学の理論と他の社会科学の理論との接合はどうだろう。湯浅の合理性—道徳性の二項対立は、かつてのモラルエコノミー論争を思い起こさせる。「JAESでは他の社会科学の学会に比べて情勢分析が少ない」とは谷口の指摘だが、現実の政策と向き合うことで理論を鍛えるという姿勢がもっと共有されてもいいのではないか。

また、会場からは「若手から“やんちゃな”議論がでないのは、理論形成力の弱さというよりも、5年くらいで事例をまとめて論文を書いて就職しなくてはならないという外部条件によるのでは」という切実な（評者にとっても！）コメントが寄せられた。日本の研究業界の構造的問題に特効薬はないだろう。ただし、複数の事例を駆使して、ばさばさと大胆に切っていくようなアームチェア型の研究というのもこれからは必要なかもしれないと感じた。

## 4 豊岡セミナー報告（前号からの続き）

豊岡セミナーに参加して

三上直之（北海道大学）

梅雨空の中、大阪から特急電車で揺られて約3時間、三田、篠山、福知山、山東、和田山と、丹波の盆地をいくつも通り抜け、セミナー会場となる城崎温泉に到着したのは、6月22日の夕方だった。

夕食後、豊岡市立コウノトリ文化館館長の松島興治郎さんのお話を聞く。豊岡で1965年に人工飼育が始まったときから、コウノトリの保護に取り組んできた方である。以来、「暗闇の中をひたすら飼育しつづけ」、1989年、ロシアから寄贈されたペアの繁殖に成功したときには「しびれるほどの感動」を味わったという。その後は毎年増殖に成功、一昨年には自然放鳥が始まり、そして今年、その一つが初めて1羽のヒナが誕生したわけである。松島さんは「この瞬間に立ち会えたことを感謝している」としながらも、「今はまだ、コウノトリとどう付き合っていくか、人間の側があたふたとしている。この鳥を受け入れる環境を創造しえていない」。そう話していたのが印象的だった。

翌23日は朝から晴天に恵まれ、4コースに分かれてエクスカーション。「野生復帰を科学する」コースに参加した。兵庫県立コウノトリの郷公園の主任研究員、大迫義人さんの案内で、田んぼの中に設けられた人工巣塔（「すとう」と読む）へ、ヒナを見に行く。国内では、43年ぶりに自然界で生まれたコウノトリだ。200メートルほど離れた所から双眼鏡で覗くと、立ち上がっているのが見えた。背丈は親鳥の半分ぐらいだろうか。

その後、コウノトリの郷公園で、飼育や研究に携わるスタッフの皆さんから、放鳥されたコウノトリの行動追跡や、本格的な野生復帰に向けた地域環境の再生、ボランティアによるコウノトリのモニタリング活動など、野生復帰に関わる研究と実践の状況について聞かせていただいた。大迫さんからコウノトリ郷公園の研究スタッフは、兵庫県立大学の教員も兼ねており、行政職員として地域に根ざして野生復帰事業に取り組みつつ、同時に、各専門分野の関心に沿って自由に研究を進めている、とのことである。スタッフの一人は、「豊岡に住んで野生復帰の事業を担いながら、研究者としての活動も自由できる。場合によって肩書きを使い分けることもでき、良いアイデアだと思う」と話していた。地域での実践と切り結ぶ環境学研究の一つのモデルを見せていただいたように感じた。3日目のシンポジウムに参加できなかったこともあり、環境再生の現場で環境社会学は何を求められているのか、他の分野に無いどんな寄与をなすのかといったことも含め、もっと話をうかがい、議論してみたい気持ちであった。

ところで、今回のセミナーでは、自由報告への応募が少なかったとのことで、もっと積極的に報告を、という呼びかけがあった。非常に耳の痛いお話であり、会員として日ごろの貢献度の低さを反省した。この点に関連して、他の参加者と雑談している時に話題になったことだが、エクスカーション付きの春のセミナーに、自由報告も準備して出かけていくのは少々荷が重い面がある。そこで勝手に思いついたのは、自由報告部会とは別に、開催地での実践・研究を題材にして、参加者が自らの研究について短い報告もしつつ語り合うワークショップなどがあれば、より議論も深まるだろうし、会員同士、自らの取り組みをカジュアルに報告しあう機会にもなって有益なのではないか、ということだ。時間の制約から、セミナーに新たな活動を盛り込むのは難しいとは思いますが、地域密着でのセミナー開催という学会の良き伝統をさらに生かす形が取れればと感じた。

最後になるが、有意義なセミナーを準備して下さった事務局長の菊地会員を始め、実行委員の皆さま、コウノトリ郷公園のスタッフ、地元豊岡の関係者の皆さまに心からお礼申し上げたい。

## ❖ 編集部よりお詫びと訂正 ❖

前号（第44号）において、以下の点に誤りがありました。お詫びして訂正いたします。

### (1) 豊岡セミナー報告の掲載について

編集部の手違いで三上直之氏の原稿を掲載しなかったため、この第45号に掲載いたします。

- (2) p.4の2行目（タイトル）「コウノトリと環境社会」→「コウノトリと環境社会学」
- (3) p.15の上から23行目「レジデント型研究」→「研究者が定住する研究」
- (4) p.20の上から31行目「三橋奈緒（みはし なお）」→「三橋奈緒（みつはし なお）」

関係者の方々には大変ご迷惑をおかけして申し訳ありませんでした。心よりお詫び申し上げます。

## 5 事務局から

### 5-1 新入会員の紹介（2007年11月～2008年1月承認分、18名、五十音順）

- (院) 荒木千史（あらかし ちひと）熊本学園大学大学院社会福祉学研究科博士課程
- (正) 粟屋かよ子（あわや かよこ）四日市大学 環境情報学部
- (院) 王 智弘（おう ともひろ）東京大学大学院新領域創成科学研究科環境学研究系国際協力学専攻博士課程
- (正) 川北 稔（かわきた みのる）愛知教育大学教育実践総合センター
- (正) 喜多川 進（きたがわ すすむ）山梨大学医学工学総合研究部持続社会形成専攻 講師
- (院) 高 娜（こう な）名古屋大学大学院環境学研究科博士後期課程
- (正) 後藤徹寛（ごとう たけひろ）（独）農業・食品産業技術総合研究機構農村工学研究所農村環境部
- (正) 佐藤 学（さとう まなぶ）三菱総研 DCS 株式会社
- (正) 下釜 卓（しもがま たかし）京都府流域下水道事務所 施設整備室 木津川流域担当係長
- (院) 宝田惇史（たからだ あつし）東京大学大学院新領域創成科学研究科社会文化環境学専攻博士課程
- (院) 寺林暁良（てらばやし あきら）北海道大学大学院文学研究科地域システム科学講座
- (正) 中井治郎（なかい じろう）龍谷大学 社会学部 非常勤講師
- (院) 野口憲一（のぐち けんいち）日本大学大学院文学研究科社会学専攻博士後期課程
- (正) 野村 康（のむら こう）立教大学 ESD 研究センター
- (院) 馬場千尋（ばば ちひろ）京都大学大学院公共政策教育部
- (院) 藤岡悠一郎（ふじおか ゆういちろう）京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科アフリカ地域研究専攻
- (院) 宮本結佳（みやもと ゆか）奈良女子大学大学院人間文化研究科社会生活環境学専攻
- (正) 山岸達矢（やまぎし たつや）（株）第一総合研究所研究員

### 5-2 退会（7名）

浅田正彦，飯塚邦彦，磯部光一，河島基弘，佐野奈緒子，柴田和幸，早瀬百合子

---

---

『環境社会学会ニュースレター』

第 45 号 (通号 50 号)

発行日：2008 年 2 月 22 日



**JAES Newsletter**

No.45

February 22, 2008



編集・発行：環境社会学会事務局  
〒 194-0298 東京都町田市相原町 4342  
法政大学社会学部 堀川三郎研究室気付

Tel: 042-783-2427

E-mail: [office@jaes.jp](mailto:office@jaes.jp)

郵便振替口座：00530-8-4016

口座名：環境社会学会

<http://www.jaes.jp/>

***JAES Newsletter***

No.45



February 2008